

# 十文字町の高齢者の現状と福祉の課題

—ひとり暮らし高齢者世帯調査から—

石 沢 真 貴

## Situation of the Aged and Welfare Problems in Jumonji Town

— On the Basis of a Research in the Lives of the Living-Alone Aged —

Maki ISHIZAWA

### Summary:

This paper aims at giving consideration to the welfare problems concerning the old-aged who live alone at Jumonji town, one of the small towns situated in the south of Akita prefecture. As there live relatively more aged people in the districts among the mountains, to study the lives of the aged there, especially of those who live alone, will be significant for the further study of the welfare problems in Japanese society.

The research has resulted in the recognition that the alone-living-aged in Jumonji town have formed a close network among their families, relatives and friends. On the other hand they make little use of welfare services, of which they have few expectations. They are not willing to participate in a social activity. Lack of willingness of taking part in the society is observed among them. Being limited in the neighborhood, the close network seems to cause the lack of their social consciousness.

### はじめに

1970年に65歳以上人口が7%を越え高齢化社会とされて以降、日本は高齢化の一途をたどり、平成10年10月現在の高齢化率は16.2% (2,051万人) に到達している<sup>1)</sup>。もちろん単純に年齢によった区分が必ずしも「高齢」社会の内実を意味しない。性別や出自といった属性による区分が一元的であるのと同じように、年齢による区分は、高齢者を非生産人口の枠に振り分け、多様な高齢者像を覆い隠すことになるからである。とはいえ、高齢期を迎える人々をとりまく状況は、健康面や安全面、家族関係などでおおきな不安を含みもつことも、否定しがたい事実であろう。

日本における世帯の推移をみると、世帯数の増加と世帯員数の減少という現象がみられるが、これは世帯規模の縮小すなわち単独世帯の増加を含意し、またその単独世帯が家族のあり方として無視しがたくなってきていることを意味しよう。事実、1990年代に入り、単独世帯は4人世帯を上回り、二人世帯と並ぶ勢いになっている。

それを高齢者世帯でみると、平成10年現在、65歳以上高齢者のいる世帯は1,482万世帯で、全世帯4,449万世帯の33%を占める。そのなかで、高齢者夫婦のみの世帯396万世帯 (26.7%)、および高齢者単独世帯272万世帯 (18.4%) の割合が増加している<sup>2)</sup>。

こうした日本社会における全体的な人口傾向は、単に高齢者福祉が一部の寝たきりや痴呆といった問題を抱えた高齢者の問題として考えられるべきものでないことを指し示している。つまり、ひとり暮らしや高齢者夫婦のみの世帯の問題を、誰もが将来かかわるであろう福祉の問題として、注目する必要があるということである。

本稿は、秋田県南に位置する地方郡部の小規模町を対象地とした高齢者と地域福祉問題を概観したものである。福祉問題を捉える場合、特殊産業の発展している地域や、福祉政策の先進地域を事例とするのでは、日本社会における一般的な高齢社会像を捉え損なう可能性が大きい。必要なのは、高齢者人口が高く、特出すべき産業や資源のない山間地域などが、いかに高齢社会における福祉を現実的に考えていくかであろう。こうした地域の高齢者

福祉をみることは、広く地方自治体の福祉政策の状況や、高齢者の生活に重ね合わせることができるとされる。以上の日本社会における現代的状況をふまえ、高齢者の地域福祉の課題を捉えるべく、秋田県平鹿郡十文字町における高齢者、特にひとり暮らし高齢者の生活について考察する。

論文の構成として、第1章では、十文字町を取りまく環境を整理、第2章では十文字町における地域福祉政策の現状を概観する。そして第3章でひとり暮らし高齢者の現状を調査結果から分析する<sup>3)</sup>。その際、家族、近隣、友人等のつきあいの状況と、福祉サービス利用の現状やサービスに対する意識、社会参加の状況とを分析の軸として、それらの関係性をみることで、十文字町の高齢者と福祉の方向性を示したい。

## 1 十文字町の概要

### 1) 地理的、歴史的概要

平鹿郡十文字町は、北方に横手市、平鹿町、皆瀬川を挟んで南方に湯沢市と隣接している。北部に横手盆地、東部に奥羽山脈、西部に出羽丘陵があり、東西より北西に緩傾斜した平坦地で、南北に貫流する雄物川沿いに水田を主とする耕地が広がる。町の東部にJR十文字駅があり、鉄道に沿い南北に国道13号線が走る。平成6年に、町北部に高速道路のインターチェンジが開設された。総面積は37.8平方kmと県69市町村中63番目だが、可住面積（総面積から林野、湖沼面積を引いた面積）は総面積の99.9%と全県第一位である。年平均気温は11℃、年間降水量は1,700ミリ、内陸部で寒暖の差が激しく、県内有数の豪雪地帯である。「秋田県市町村区域図」では、平鹿郡は全般に過疎地域に色分けされ、なかで十文字町は「低開発地域 工業開発地区」に区分されている。

町内の集落は文禄（1590年代）以降に開かれたものといわれ、明治22年、町村制実施に伴い十文字、三重、植田、睦合の4村が誕生、昭和29年10月十文字町、三重が合併、昭和30年4月に十文字町、植田村、睦合村が合併して現在の十文字町となる。

昭和26年十文字町と三重村が都市計画法の適用町村となり道路網の整備が行われると、周辺地の宅地化が進んだ。昭和36年、西原地区に宅地造成区画整理事業が開始されると、世帯数が増加していく。38年建設省職員住宅17戸を購入して町営住宅をつくり、腕腰団地とする。つづいて公営住宅として梨木、旭、上掬、山道、十五野団地を建設し、現在221戸（建築戸数は251）となっている。昭和58年に十文字中央団地129区画、平成2年に八萩工業団地造成、平成4年には中央団地を町単独で33区画拡張造成し、また八萩工業団地も第2次造成となった。こ

うして30年の間で十文字地区の世帯数は倍増し、昭和30年に1,048世帯、昭和60年には2,087世帯になり、周辺の過疎化の中で人口増加がつづいた。その背景には、農山村の産業事情や吉乃鉾山の閉山による多くの離職者が移住、定住し、また交通の便、生活の便を求めた隣接の町村からの移住があったとされる<sup>4)</sup>。

### 2) 産業

平成7年10月現在の秋田県の産業就業者数をみると、産業就業者総数は608,735人、第一次産業は79,926人（13.1%）、第二次産業は195,627人（32.1%）、第三次産業332,322人（54.6%）である。また、平鹿郡の産業就業者数をみると、産業就業者総数は37,204人で、産業別の割合は第一次産業9,650人（25.9%）、第二次産業12,671人（34.1%）、第三次産業13,732人（36.9%）である。このうち十文字町をみると、産業就業者数は7,702、そのうち第一次産業1,611人（20.9%）、第二次産業2,615人（34.0%）、第三次産業3,273人（42.5%）で、製造業が最も多く、農業、卸売・小売業、飲食店、とつづく。十文字町は平鹿郡内でみると第三次産業の占める割合が比較的高い傾向にあるが、県全体や他郡部と比較してみても、総じて特に際立った特色はみられない<sup>5)</sup>。

駅前を中心に商店街が発展してきた経緯があるものの、昭和55年をピークに減少し、平成5年にはピーク時の7割を切っている。代わって郊外に大型のスーパーが進出し、自家用車を利用する客は整備された道路網を利用し大型店へ向かい、地下商店街からはさらに客足が遠のいているのが現状である<sup>6)</sup>。

### 3) 人口、世帯、高齢化率

平成10年10月1日現在の秋田県の総人口数は約120万1千人であり、そのうち65歳以上の人口は約26万3千人で、高齢化率（65歳以上人口の割合）は21.9%である。高齢化率の高い県のランキングの変化をみると、平成2年（1990年）に初めて上位10位以内に表示され（全国8位、15.6%）、その後平成9年10月1日現在21.2%で、島根県、高知県に次ぎ全国3位となっており<sup>7)</sup>、将来推計（平成37年）では33.8%で第1位とされている<sup>8)</sup>。

平成10年の十文字町は人口14,605人で65歳以上が3,553人であり、高齢化率は秋田県、平鹿郡をも上回り24.3%である。〈表1〉

これを世帯の変化でみてみると、平成10年の県の総世帯数（一般世帯）は約38万5千世帯で、そのうち65歳以上の単独世帯は2万529世帯で、総世帯数（一般世帯）の5.3%を占める。これに対し十文字町は、4,151世帯で、そのうち65歳以上単独世帯は183世帯あり、総世帯数（一般世帯）の4.4%になっている。〈表2〉

&lt; 表 1 &gt; 人口の推移

	人 口								
	総 数			65 歳 以 上			65歳以上 (%)		
	平成 2 年	平成 7 年	平成10年	平成 2 年	平成 7 年	平成10年	平成 2 年	平成 7 年	平成10年
十文字町	14,965	14,703	14,605	2,490	3,121	3,553	16.6	21.2	24.3
平 鹿 郡	73,467	71,138	69,718	13,449	16,461	18,120	15.6	19.3	21.9
秋 田 県	1,227,478	1,231,667	1,201,178	191,573	237,682	263,219	15.6	19.3	21.9
全国(千)	123,611	125,570	126,486	14,895	18,261	20,508	12.0	14.5	16.2

平成 2, 7 年：「国勢調査報告書」

平成10年：総務庁「人口推計年報」

&lt; 表 2 &gt; 世帯の推移

	世 帯											
	総数 (一般世帯)			65歳以上の者のいる世帯			65歳以上単独			65歳以上単独 (%)		
	平成 2 年	平成 7 年	平成10年	平成 2 年	平成 7 年	平成10年	平成 2 年	平成 7 年	平成10年	平成 2 年	平成 7 年	平成10年
十文字町	3,902	4,016	4,151	1,822	2,181	2,181	119	174	183	3.0	4.3	4.4
平 鹿 郡	17,704	17,872	18,142	9,788	11,250	11,250	521	745	801	2.9	4.2	4.4
秋 田 県	357,557	373,972	385,614	138,057	163,603	163,603	13,052	18,834	20,529	3.6	5.0	5.3
全国(千)	40,670	43,900	44,496	10,729	12,695	14,822	1,623	2,202	2,724	4.0	5.0	6.1

平成 2, 7 年：「国勢調査報告書」

平成10年：秋田県総務部情報統計課，高齢福祉課調べ

「国民生活基礎調査」

県の世帯員数は、昭和60年で4人が一番多かったのが、平成2年には二人になり、平成7年ではひとりが三人に迫る勢いである。平成10年では県の世帯あたりの人員は3.11人で、十文字町は3.51人である<sup>9)</sup>。

## 2 地域福祉の取り組みと在宅介護、デイサービスの利用状況

### 1) 十文字町の高齢者福祉計画と実施状況

このような十文字町において、福祉制度はどのようなものであろうか。上述したように、現在東北中央自動車道路のうち横手から十文字までの工事が平成6年11月に完成し、十文字インターチェンジが開設している。これを機に、町では、インターチェンジ周辺土地利用構想を立て開発計画に取り組んできている。そのひとつにあげられているのが、現存の特別養護老人ホーム「憩寿園」を中心とした社会福祉施設ゾーンを構想し、家庭奉仕員の窓口や高齢者介護技術研修の場を設定する計画である<sup>10)</sup>。また、「十文字町老人保健福祉計画」は「とよつてからも、まめであんちことしねえで、暮らせる十文字町」(老いても健康で安心して暮らせる十文字町)をめざし、高齢者住宅整備金の貸し付け事業や、「幸福会館」、「高齢者創作館」のワークルーム事業を行っている。

社会福祉協議会においては、< 表 3 > のような取り組みがなされている。圏域に特別養護老人ホーム6ヶ所(定員354床)があり、入所待機者は100名を超える。他に養護老人ホーム3ヶ所(定員150人)、軽費老人ホー

ム2ヶ所(定員65人)、ホームヘルパー84人(平成10年度実績)、デイサービスセンター10ヶ所、在宅支援センター5ヶ所となっている<sup>11)</sup>。< 表 4 >

### 2) 「在宅介護サービスセンター」、「デイサービスセンター」の利用状況

十文字町の社会福祉協議会本部には、「デイサービスセンター」、「在宅介護支援センター」、「ホームヘルプセンター」が併設されており、「デイサービスセンター」には生活指導員1名、看護婦1名、寮母2名、入浴介助員1名、業務員1名、調理員1名、調理員補助1名、訪問入浴補助2名が配属されている。在宅介護支援センターには相談員として2名、「ホームヘルプセンター」にはヘルパーが7名となっている。他に専門委員会として在宅福祉委員会7名、地域福祉専門委員会7名、委員会として歳末たすけあい配分委員会15名、地域福祉計画策定委員会12名という構成になっている<sup>12)</sup>。

#### ① 在宅サービス利用の現状

そのうち「在宅介護支援センター」では、ヘルパー派遣、デイサービス利用、ショートステイ利用、施設入所、介護(看護)相談、訪問入浴、訪問看護、介護見舞金、医療機関との調整、申請代行といったことについての住民からの相談を受けつけており、平成11年11月分における相談受付状況は、以下のとおりである。対象者の身体状況は「虚弱」であるケースが18件、「準ねたきり」27件、「ねたきり」92件、「痴呆」13件といった相談数になっ

＜ 表 3 ＞ 十文字町における地域福祉実施項目

基本項目	実施項目
在宅福祉サービスの充実	①ホームヘルパー活動の充実 ②声かけ牛乳の実施 ③ふれあい弁当の配達 ④ふれあい安心電話の設置促進⑤入浴車派遣事業の充実 ⑥高齢者健康相談の実施 ⑦除雪対策の実施 ⑧単身高齢者等交流会の実施 ⑨介護講習会の開催 ⑩介護用品の貸出と支給 ⑪福祉保健情報の提供
福祉教育・ボランティア活動の充実	①社会福祉大会の開催 ②ボランティアの養成と組織づくり ③福祉教育協力校の指定 ④福祉体験学習の実施
地域ネットワーク活動の充実	①相談活動の充実 ②ひとりの不幸も見逃さない運動の推進 ③当事者の組織づくり
福祉活動の拠点づくり	①総合福祉センターの設置促進 ②在宅介護支援センターの設置促進 ③デイサービスセンターの設置促進
社協組織と財政基盤の強化	①会費の増強 ②社協独自基金の造成 ③町地域福祉基金運用益の活用 ④福祉協力員の設置

「十文字地域福祉活動計画」参照

＜ 表 4 ＞ 平鹿郡内の高齢者福祉施設入所状況

(人)

	養護老人ホーム			特別養護老人ホーム						総計
	ひらか壮	後総合老人ホーム	南部老人福祉	映月壮	憩寿園	白寿園	雄水苑	鶴寿園	いきいきの郷	
十文字町	1	1	3	24	8	3	0	1	2	43
平鹿郡	38	25	18	42	61	35	31	35	13	298

秋田県平鹿福祉事務所「平成11年度福祉概要」参照

ている。世帯状況を見ると、「独居」10件、「老人世帯」16件、「その他」124件。相談後の対処結果を見ると、幹旋・取次が57件、助言などが48件、サービス適用になったものが45件である<sup>13)</sup>。

## ② デイサービス利用の現状

「デイサービスセンター」は、平成11年11月分としてみると、利用件数は延べ320件で、一日平均して16.0人の利用があった。実登録者数は111人（男性41人、女性70人）である。付き添い者はなく、ほとんどが送迎、動作訓練、食事、入浴、生活指導といったサービス内容を利用しており、選択の多様性はみられない。ボランティアは常時入っているわけではなく、一日に十数人がまとめて入る日が数日あるというかたちになっている<sup>14)</sup>。訪問入浴サービスは月水金で、一日4、5名の利用となっている<sup>15)</sup>。

## 3 十文字町におけるひとり暮らし高齢者の現状

### 1) 十文字町におけるひとり暮らし高齢者の概観

福祉制度利用の状況を前章でみたが、では、利用者で

ある側の十文字町の高齢者とはどのような人々であろうか。特にここではひとり暮らしの高齢者に限りみていくことにする。平成2年現在119人であったひとり暮らし高齢者は、平成10年には183人となり、8年間で1.5倍になっている<sup>16)</sup>。最も新しい統計（平成11年11月現在）によれば、ひとり暮らし高齢者の総世帯数は189世帯に増え、自宅住まいが162世帯、町営住宅が17世帯、借家5世帯、アパート5世帯である。子どもがいない高齢者は47人。病弱な高齢者は37人である<sup>17)</sup>。

病弱な高齢者のうち、自宅は31世帯、町営住宅、借家、アパート、間借りが6世帯である。病弱で子どもがいない世帯は10世帯である。また自宅以外（27世帯）で子どもがいないひとは10人。なかでも町営住宅で子どもがいないのは6人となっている。

先の「在宅介護支援センター」の11月のひとり暮らし高齢者による利用は7人である。主な利用は「ホームヘルパー」で、7人とも自宅に住み、病弱で子どもがいない。うち3人は痴呆の症状があるという状況である。

## 2) 調査結果にみる十文字地区のひとり暮らし高齢者

こうした十文字におけるひとり暮らし高齢者を、調査結果から地区を限定してみたのが以下の報告である<sup>18)</sup>。高齢者がどのような状況でひとり暮らしをしているのかを、高齢者の日常生活における家族や親戚、友人とのネットワークと福祉サービスの利用、社会参加の状況から捉えようとするのが本報告の主要な目的である。調査項目としては、①家族関係、親戚関係、②近隣関係、③居住形態（地区）、④福祉サービスの利用やそれに対する意識、⑤社会参加の状況である。

対象地は、十文字町のなかでも、①JR十文字駅西側の本町、通町、東町、開発住宅地の西上町、②駅を挟み東側に位置する公営住宅の旭、上掬、山道団地と佐吉開、③旧農業集落の梨木、仁井田といった十文字地区である。

対象者は、社会福祉協議会によるひとり暮らし高齢者の名簿より、地区のバランスを考慮しながら任意で70名を抽出し、事前に調査を依頼したうえで、平成11年10月1日から3日の間、直接面接で行った。

調査結果の概要であるが、回答途中での拒否を含む全回答者は39名である。地区別にみると、前述の①における回答者が過半数を占めている。病弱とされるのは6ケースで、比較的健康な高齢者が多い結果となっている。性別では女性が31名、男性8名、年齢は60歳代が7名、70歳代が24名、80歳代が7名である。生まれはほとんど近隣市町村内で、十文字町はそのうち四分の一を占める。十文字町内での居住歴は20年以上が大半を占める。居住形態は、自宅が26名、町営住宅が10名、その他が3名である。

## 3) 家族関係、近隣関係

子どもや親戚の居住地は、東京、埼玉など関東を中心とした地域、福島などの東北地域および県内における遠隔地（秋田市、大曲市）、そして十文字町近隣市町村（横手市、湯沢市を含む平鹿郡内）に大別できる。子どもや兄弟姉妹が十文字もしくは近隣市町村に住んでいる人は、町営住宅や旧農村集落に多い。なかでも、町営住宅居住者には子どもも親戚も十文字近隣市町村に居住している場合が目立ち、子どもが遠隔地に居住する場合でも、親戚とりわけ兄弟づきあいが密に行われている。つきあいの程度は、疎遠である場合もみられるが、一般に、距離的に近いほど行き来する傾向がある。

さらに、親しく行き来する友人関係をみると、居住地区のごく狭い範囲でのつきあいがみられる。団地なら団地内のつきあいになっており、隣近所のひとり暮らし高齢者同士のつながりがみられる。

子どもとの同居については、同居したいができないだろうという回答も含め、同居するつもりはないという回

答が、子どもの居住地の遠近にかかわらずある。施設や友人との同居という回答もみられる。

## 4) 福祉サービスの利用と意識

つぎに、福祉サービスの利用と意識をみると、ホームヘルパー利用が2件、牛乳や弁当の配給が4件などで、それも「町で言われたので」もらっているというような消極的な利用がみられる。今後のサービスの要望も、「いざというときにすぐ老人ホームに入れるようにしてほしい」というのがみられる一方、「特にない」も多く、町営住宅ではほとんどの人が「特にない」としている。第2章でみた在宅サービス等の利用状況からみても、日常において、町の福祉サービスに対する関心、期待感は、現時点では希薄であるといえる。

## 5) 社会参加

最後に、社会参加の状況をみると、老人クラブをあげる人が比較的見受けられる程度である。過去に文化センターの講座参加があった人も、継続はみられない。まったく参加していないという回答のほうが多い。

## 4 調査のまとめ

これらの結果からみえてくる十文字町東部の十文字地区におけるひとり暮らし高齢者は、第一に、近隣に子ども、親戚なかでも兄弟、友人が集住し、日常のつきあいをしているということである。これは逆にいえば、ネットワークの狭さを指摘することができるだろう。第二に、福祉サービスの利用やそれへの期待、また社会参加に積極性がみられないことである。第三に、その一方で、子どもとの同居を望まず、いざというときは施設にすぐ入れるようにといった要望や、友人と暮らしたいとする人もみられた。

これらのことは、兄弟、近隣など、同世代の多い限られた狭いネットワークが、日常生活を支えあう関係として機能していることを前提にした意識といえるだろう。そうした人間関係が、相互にある程度関与しあい、福祉サービスや社会参加の機会を特に意識しない環境をつくりだす一要因になっているように思われる。実際に、将来子どもとの同居を考えているかという問いに、今は考えていない、考えたくないという意識が垣間みられる。

現時点での、同世代同士の密なネットワークの構造が、今後5年、10年と経過したときに、どのように変化し、ひとり暮らし高齢者の日常生活にどのように影響を及ぼすのか、今後の地域福祉の課題を示唆するものに思われる。

## おわりに

十文字町を事例として、地方郡部小規模町の地域福祉と高齢者の関係をみてきたが、報告は、細かいネットワークの分析や、ひとり暮らし高齢者のひとりになるプロセスなどを追うには至らず、あくまでも概略を示したにすぎない。また、今回の調査において、期間中留守であった高齢者世帯が長期不在であったり、施設に入所していたりといった事実が明らかになるにつれ、調査対象から外れている高齢者が新たな福祉問題を示す可能性もある。いずれにせよ、今後の課題として結びとしたい。

## 註

- 1) 総務庁「人口推計年報」
- 2) 厚生省「平成10年国民生活基礎調査」
- 3) 本報告では、秋田大学教育文化学部地域科学課程政策科学選修の教官、学生により、平成11年10月に行われた「秋田県十文字町における高齢者の生活意識」調査をもとにした分析をおこなっている。
- 4) 「十文字町史」pp.1120-21
- 5) 「平成10年版 秋田県勢要覧」
- 6) 「十文字町史」p.1104
- 7) 総務庁「人口統計」
- 8) 厚生省国立社会保障・人口問題研究所「都道府県別将来推計人口」
- 9) 「平成10年版 秋田県勢要覧」
- 10) 「十文字町史」pp.1502-3
- 11) 秋田県平鹿郡福祉事務所「平成11年度 福祉概要」p.1, p.20
- 12) 「社会福祉法人十文字町社会福祉協議会組織図」参照
- 13) 「在宅介護支援センター相談受付状況（11月1日～11月30日）」参照
- 14) 「十文字健康福祉センター（デイサービス）サービス別利用状況」平成11年11月分
- 15) 「十文字健康福祉センター（訪問入浴サービス）利用状況」（平成11年11月分）
- 16) 参考までに、平成11年7月1日現在の統計を記すと、186人（男性26、女性160）で十文字125（17、108）、三重24（1、23）、植田17（3、14）、睦合20（5、15）。年齢別にみると、65～69歳が40人（21.5%）、70～74歳が58人（31.2%）、75～79歳が52人（28.0%）、80～84歳が23人（12.4%）、85歳以上が13人（6.9%）となっている。
- 17) 平成11年11月現在 社会福祉協議会調べ
- 18) 3) 参照